



〒892-0841
鹿児島市照国町13-42
カトリック鹿児島教区
電話099（226）5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行 教区広報部
1部60円年間千共1100円



教区の皆さま、新年あけましておめでとうございます。2025年通常聖年も閉幕し、教会は新たな目標を掲げて前進することになります。

年頭にあたり、私は鹿児島教区目標として「福音宣教する教会づくり」を掲げたいと思います。復活されたイエスは、弟子たちを宣教に遣わすにあたり、次のように仰せになりました。

「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にし

なさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」（マタイ28：18～20）

イエスはこの宣言が空文に終わらないために、弟子たちに、御父とご自分の霊である聖霊を遣わして、教会を設立なさいました。従

年頭の辞

「福音宣教する教会づくり」

鹿児島教区 司教 中野裕明



って、地上にある教会の使命は、必然的に上記のイエスの宣言を実行することにある、と言えます。ところで、鹿児島教区の

日時…2026年1月31日（土）14時～
場所…カテドラル・ザビエル教会
司式…中野裕明司教様、小隈憲士神父様

奉献生活者と共にささげるミサ

鹿児島教区では、毎年2月2日（主の奉献の祝日）の前後に、教区内の奉献生活者が集まって召命の恵みに感謝しながら、新たな召命の恵みを願い祈っております。鹿児島教区の上に新たに司祭・修道者の召命の恵みが豊かに与えられますよう共に祈りたいと思います。当日はミサ後、簡単な茶話会を準備いたしております。多くの皆さまとお会いできることを楽しみにしております。

鹿児島教区修道女連盟一同

100年の歴史を持つ鹿児島教区ですが、この100年間で信者数の伸びは、1・7倍弱だと言えます。この数字が、多いか少ないかは別として、キリストの福音が教区中に行き渡る余地は十分あることは確かです。そこで、知牧区創設100周年を1年後に記念するにあたり、いくつかの努力目標を提示いたします。

- ・小教区共同体の優先課題として、いまだにキリストの福音に触れることの無い人々を教会に招き入れること。
- ・カトリックの名を冠している幼稚園、中学・高等学校、大学、社会福祉施設等が、神の愛の実践の場と

1月1日は世界平和の日

聖パウロ6世教皇は1967年12月8日、ベトナム戦争が激化するなか、来る1月1日を平和の日とし、平和のために特別な祈りをささげるよう呼びかけました。それ以来、全世界のカトリック教会は毎年1月1日を「世界平和の日」とし、戦争や分裂のない平和な世界が来るように祈っています。

平和はキリスト教そのものに深く根ざしています。キリスト者にとって平和を唱えることは、キリストを告げ知らせることにほかなりません。新年にあたって「信仰の原点に立ち戻り、すべての善意ある人々と手をたずさえて、平和な世界の実現に向かって、カトリック信者としての責任を果たしていく」（日本司教団『平和への決意』）ことができる決意を新たにしたいと思います。

社会の現状を踏まえ、教会の特性の一つであるカトリック性（普遍性）を発揮

新年が神様の豊かな祝福で満たされますように。

- ・最後に鹿児島使徒座知牧区に認定されてから、教区長として、その成長・発展にご尽力下さった歴代の教区長方のために感謝と天の御父からの豊かな報いが得られるように祈ること。
- ・歴代教区長は以下の通り。
エジド・ロア神父（フランススコ会カナダ管区）
1927～1936年在任（以下、同じ）
・パウロ山口愛次郎神父（長崎教区出身）
1936～1940年
・フランシスコ出口一太郎神父（長崎教区出身）
1940～1955年
・ヨゼフ里脇浅次郎枢機卿（長崎教区出身）
1955～1968年
・パウロ糸永真一司教（長崎大司教区出身）
1970～2006年
・パウロ郡山健次郎司教（鹿児島教区出身）
2006～2018年

2026年 謹んで新春をお祝い申し上げます。

鹿児島教区の聖職者（敬称略）

教区長 中野裕明

名誉司教 郡山健次郎

総代理 泉 浩二

法務代理・事務局長 霧島 彬

鹿児島地区

末吉卓也（始良教会）、朴鎮亮（指宿教会）、申

賢圭（加世田教会）、李秉徳（鴨池教会）、小隈

憲士（ザビエル教会）、盛 克志、鄭容旭（谷山

教会）、鈴木康由（種子島教会）、泉 浩二（玉

里教会）、ジュオン・ヴァン・ドオク（溝辺教

会）、貴島丈弥（紫原教会）、霧島彬（屋久島教

会）、ファン・ミン・アン（吉野教会）

大隅地区

グエン・ホグ・タム（鹿屋教会）、サンタマ

リア・ジュセッペ（国分教会）、オローフ

オ・ベルナルディーノ（志布志教会）、霧島

彬（垂水教会）

北薩地区

宋診旭（阿久根・出水教会）、橋口啓悟（大

口教会）、福岡英雄（川内・入来教会）

奄美大島地区

藤澤義義（大笠利教会）、朴昶奎（小宿教会）、

鄭法鍾（瀬留教会）、郡山健次郎（大熊教会）、

梶尾泰英（名瀬聖心教会）、金熙一、久保芳一、

ニコラス・スワイヤテク（古田町・古「屋教会）

徳之島地区

ウオラ・ジョヴァンニ・ドン・ボスコ、石田

望（母間・和泊教会）

その他

小川靖忠（玉里善き牧者幼稚園、山口好信（出

向）、永山幸弘、寝占敦之（静養）

教区助祭

久山元太郎（川内教会）

教区終身助祭団

石神秀人（阿久根教会）、小島芳武（川内教

会）、池上利男（母間教会）

聖年に伴う南イタリア巡礼に参加して①

加世田小教区 枕崎教会 長 野 宏 樹

2025年10月2日〜12日の間、聖年に伴う南イタリア巡礼に参加しましたので報告したいと思います。

今回の巡礼は東京大司教区の菊地枢機卿の着座式への参列とローマからナポリを経由してシチリアまでの旅でした。参加者は札幌、東京、大阪、長崎、そして鹿児島からの37人。シチリアまで足を延ばしたのは列福申請中のシドティ神父の出身地パレルモ大司教区を訪問し、列福申請作業状況を聞くことと、シドティ神父の屋久島上陸地の鹿児島教区の中野司教、帰天地の東京大司教区の菊地枢機卿が申請の作業をしているパレルモ大司教区を表敬訪問するためでした。

巡礼は出発地ローマからベネディクト会発祥の地モンテ・カッシーノ、ナポリ近郊のポンペイの遺跡、そして教皇の避暑地カステルガンドルフオ宮殿、菊地枢機卿の名義教会であるサン・ジョバンニ・レオナルディ教会、シチリアのパレルモ大司教区、モンレアレ大司教区を巡りましたので、概要を報告したいと思います。

壁の外に建てられたことから名づけられ、聖パウロの遺骸を祭った場所を中心として、紀元386年に起工し、400年頃に完成したバジリカです。

ランシスコはここでフランシスコ会の会則の承認を得たとされ、聖堂の広場にはフランシスコの像も設置されています。

スコの遺言でこの聖堂に埋葬されたそうです。お墓は聖堂の側廊に設置され、「FRANCISCUS」とだけ名前が彫られているだけでそばを通っても気づかない質素なものでした。現時点では巡礼者で溢れ、行列を作って墓参りをしていました。フランシスコ教皇は世界中の司牧訪問に出かけるときは必ずこの教会に参詣し祈ってから出かけたそうです。

短信

タリタクム来鹿 人身取引問題に取り組む部会（タリタクム）で、その啓発活動を行っている若者6人が鹿児島を訪れ、純心短大（12月12日）、教区本部（13日）で報告会を実施した。またメンバーは翌日（14日）のザビエル教会のミサにも参列し、ミサの終わりに活動報告した。



タリタクム来鹿 人身取引問題に取り組む部会（タリタクム）で、その啓発活動を行っている若者6人が鹿児島を訪れ、純心短大（12月12日）、教区本部（13日）で報告会を実施した。またメンバーは翌日（14日）のザビエル教会のミサにも参列し、ミサの終わりに活動報告した。

2回目の聖年巡礼で聖心教会へ

徒歩で車で大熊小教区

聖年もあと残すところ2か月を切った11月9日（日）「ラテラノ教会献堂」の祝日、私たち大熊小教区では、教区指定巡礼教会である名瀬聖心教会へ2回目の聖年の巡礼を実施しました。

盛夏の陽射しが和らいだ青空のもと、大熊教会に指定時間に6人が集い「はじめの祈り」を唱え、名瀬聖心教会への徒歩巡礼を開始



この長い教会の名は、ローマ市の周りを取り巻く城壁の外に建てられたことから名づけられ、聖パウロの遺骸を祭った場所を中心として、紀元386年に起工し、400年頃に完成したバジリカです。

この教会はローマ教区のカテドラルであり、この司教がローマ教皇です。福者ペトロ岐部が1620年11月15日に司祭叙階された場所でもあり感慨深いものがありました。アシジのフ

聖年の巡礼で奄美大島を旅して

鹿屋教会 森田佳代子

貴島丈弥神父（紫原教会）を団長に、紫原、ザビエル、谷山、鹿屋、喜界島、鴨池教会からの12人が11月16日（日）から19日（水）まで「聖年の巡礼」で奄美大島を訪問した。

このように、奄美大島の教会が永年にわたり存在し続けていることに對して「島のカトリック信者たちの信仰心が如何にあつたのだろうか」と感激し、思わず東洋の奇跡「信徒発見」に思いを馳せました。

最後に訪問した加計呂麻の西阿室教会にはマリア観音像がありました。ここに設置してある由来をお聞きした時、これはまさに奇跡ではないかと思ひながら、お話に聞き入っておりまして、こんな話でした。

このマリア観音像は、ある人が中国から持ち帰ったものであり、これを自分の家に飾っていたところ、集落の古い師の目にとまり、古い師はそれを譲り受け、占いの霊力を授かる神として拜んでいたそうです。



マリア観音

短い日々でしたが本当に楽しく過ごすことができました。私自身としても、自分の信仰について考えさせられる時間にもなり、一層信仰心が深まった思いをした巡礼の旅でもありました。

大きな心で歩む希望の巡礼者として毎日を過ごすことができるよう祈ろう」とメッセージを下しました。

その後は共同祈願で聖年の巡礼への感謝のため、病氣や戦争で苦しんでいる人々のために平和を願う祈りをささげました。

ミサ後は、聖心教会主任司祭の栃尾泰英神父さまの呼びかけで聖心教会センターで茶話会が開かれました。

時間忘れて交流し語り合い、聖心教会の方々の温かいおもてなしに感謝の気持ちで溢れました。（大熊小教区レポート）



聖心教会のセンターでの茶話会

シドティ上陸記念祭に参加して

加世田小教区 枕崎教会 長野 宏 樹

毎年11月23日に開催されるシドティ神父上陸記念祭は今年で40回目であった。

長いこと記念祭の主催は屋久島町と鹿兒島教区が交互に担当してきたが、昨年からは「NP O 法人」やくしま未来工房」が主催し、後援が熊毛支庁、屋久島町、協力が屋久島教会と小島区の形で開催されている。

今回の記念祭は、第1部は9時半から15時まで「日出ずる国へ！ ひだまりの祭典」というテーマで聖堂横の広場でイベントを中心に開催され、参加者は約150人。第2部は16時から



16時からささげられたミサ

聖堂で上陸記念ミサをささげるといふものだった。

頭初「ひまわりの祭典」というテーマで周囲の畑にひまわりを植え、満開の状態で開催される予定で準備が進められたが、残念ながら天候不順の影響で花が見られなかったので急遽テーマ名を変更しての開催となった。

今回の特徴は広場の一部に建設中の記念館内で、シドティ神父についての展示や地元食の提供などが行われたことである。記念館は来年3月完成を目指して鋭意建設が進められている。

開会には主催者の挨拶に引き続き屋久島町長、教育長、地元区長、中野司教の挨拶で開始された。

第1部は、展示、人形劇、物品販売、ミニライブなどが行われ、広場では「シドティ神父と藤兵衛」の人形劇が披露されシドティ神父についての理解を深めるのに有益であった。イベントとしては安房小学校児童の金管バンド演奏、ギター弾き語り、西アフリカ伝統楽器ジャンベ演奏とダ

イグナチオの霊躁③①

紫原教会主任司祭 貴島 丈 弥



本当の自分の姿

もう一度マリア様から赤ちゃんを受け取ると、やはりにつこり笑っていました。

するとマリア様が「あなたの心はとても清いんですね。わたしのこの赤ちゃんもあなたのことが大好きな

ようです」と言われたので、我に返り、「いいえ、わたしはこの清い赤ちゃんに触れる価値のない汚れた者です」と言って、マリア様に返してしまいました。

するとまたマリア様から、「赤ちゃんを抱いてください」と何度も頼まれ、何度も断りましたが、ついにま

ンスなどが披露され楽しいひと時であった。11時には記念館の棟上げを祝して餅播（菓子播き）きが大歓声の中で行われた。また、会場の一隅では子ども向けの環境学習会（草笛や笹船作りなど）が行われ、子どもだけでなく親や地元の人・巡礼者などの参加があり有益なひと時を楽しんだ。

第2部は16時から聖堂でミサが東京、大阪、福岡、長崎からの巡礼者も交えて中野司教の司式でささげられた後、集会所と食堂で信



者たち手作りのカラシ団子などをいただきながら交流のひと時もたれた。列福申請を担当しているシチリア・パレルモ教区からの情報では「シドティ神父と長助、ハル」3人の列福申請は順調に進み、2025年4月にバチカンの列聖省に提出され、今後列聖省の手

Ánh Sáng Giữa Đường Xa

Sống sứ vụ tại Nhật Bản đối với tôi giống như mở ra một hành trình rất riêng, nhẹ nhàng nhưng đầy những khám phá âm thầm. Tôi đến đây với hành trang khiêm tốn của một nữ tu trẻ, vừa học ngôn ngữ, vừa hòa nhập với nhịp sống mới, vừa cố gắng phục vụ cộng đồng người Việt đang miệt mài lao động nơi đất khách. Những điều tôi làm không lớn lao, nhưng mỗi ngày lại cho tôi lý do để nhận ra Chúa vẫn đang đồng hành cách rất nhẹ nhàng.

Trong sự đồng hành với những người Việt xa quê, tôi cảm nhận được nghị lực và lòng kiên trì của họ. Mỗi cuộc gặp gỡ – một lời hỏi thăm, một sự lắng nghe, một đôi phút cầu nguyện chung – đều trở thành nơi tôi thấy Chúa âm thầm gieo hy vọng vào lòng người. Sự hiện diện nhỏ bé ấy cũng giúp tôi nhận ra chính mình đang được Chúa dẫn đi từng bước.

Trong hành trình này, **Năm Thánh Hy Vọng** trở thành một ánh sáng nội tâm. Năm Thánh giúp tôi hiểu rằng hy vọng đích thực không nằm ở những thành quả dễ thấy, mà ở việc để Chúa thực hiện điều Ngài muốn qua những phục vụ đơn sơ. Mỗi bước đi, dù nhỏ đến đâu, nếu được trao vào tay Chúa thì đều mang một ý nghĩa quý giá cho hành trình đức tin.

Bước vào **Mùa Vọng**, lời nhắc “Chúa đang đến” trở nên thật gần gũi. Ở Nhật, mùa này có một vẻ bình yên rất riêng, khiến tôi dễ nhận ra Chúa đến qua những điều bé nhỏ: một ánh mắt tìm sự nâng đỡ, một nụ cười giữa ngày dài, hay một cảm giác bình an kín đáo sau giờ cầu nguyện. Chúa đến để ở cùng tôi trong chính những gì tôi đang sống – ngay cả khi tôi còn nhiều điều phải học và nhiều giới hạn phải vượt qua.

Trong bầu khí chuẩn bị mừng **Chúa Giáng Sinh**, lời **vọng của Gioan Tiền Hô** lại vang lên thật rõ: “*Hãy dọn đường cho Chúa.*” Không phải dọn đường bên ngoài, mà là dọn lại lòng mình: nhẹ bớt lo âu, chậm lại trước những vội vàng, và mở ra khoảng trống để Chúa có thể bước vào. Dọn đường đôi khi chỉ là để trái tim mềm lại và sẵn sàng hơn với điều Chúa muốn làm nơi tôi.

Khi đặt song song hành trình hy vọng của Năm Thánh, lời mời đón Chúa của Mùa Vọng, và tiếng kêu dọn đường của Gioan Tiền Hô, tôi nhận ra tất cả đều mời gọi tôi hướng về **Chúa Giêsu**, Đấng là nguồn sáng và nguồn hy vọng cho sứ vụ của tôi.

Giữa đất khách, tôi biết rằng Chúa không chỉ đến trong đêm Giáng Sinh năm xưa, nhưng đang đến mỗi ngày trong những gặp gỡ rất bình dị của đời truyền giáo. Và chính sự hiện diện âm thầm ấy trở thành **ánh sáng giữa đường xa**, nâng đỡ tôi bước đi trong bình an và tin thác.

Sr M.Daria Thiên Thanh SPP

会 と 催 し 1月

1日（木）神の母聖マリア（降誕の8日目）

▼世界平和の日

4日（日）主の公現

▼七田八十吉神父命日（1980年）

▼ルカ神父命日（1998年）

6日（火）ハンマ神父命日（2024年）

7日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分

▼盛克志神父霊名（聖ライムンド）

8日（木）久保俊弘助祭命日（2024年）

10日（土）青年会・教区本部・18時

11日（日）みことばを祈る集い・ザビエル教会・10時

13日（火）主の洗礼

14日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分

▼永島泰蔵神父命日（2002年）

18日（日）年間第2主日

▼キリスト教一致祈禱週間・25日

「すべての人を一つにしてください」という最後の晩餐でのイエスの祈りに耳を傾けるわたしたちはまた、折にふれて目に見える一致を示すように求められています。それは、ともに祈り、支え合うことによつて、神がすべての人の救いのためにイエスを遣わしたことを「世が信じるため」です（ヨハネ17・21〜23参照）。

キリスト教諸教会の間で毎年1月18日から25日に定められている一致祈禱週間は、このことを強く意識する機会となるでしょう。この一致祈禱週間のために、教皇庁キリスト教一致推進評議会と世界教会協議会は1968年以来、毎年テーマを決め、「礼拝式文」と「8日間のための聖書と祈り」を作成しています。日本ではカトリック中央協議会と日本キリスト教協議会が共同で翻訳し、小冊子を発行しています。

19日（月）ハイシク神父命日（1989年）

21日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分

24日（土）鄭容旭神父叙階記念（2014年）

25日（日）年間第3主日（神のことばの主日）

▼オリブの会・教区本部・14時

▼世界こども助け合いの日（献金）

▼郡山健次郎名誉司教霊名（聖パウロの回心）

26日（月）教区司祭大会・教区本部・27日

▼フェリエ神父命日（1919年）

27日（火）成相明人神父命日（2020年）

28日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分

31日（土）奉献生活者と共にささげるミサ・ザビエル教会・14時

▼ウオラ神父霊名（聖ドンボスコ）

【司教日程】7日中野アカデミー、14日中野アカデミー及び教区経済問題評議会、21日中野アカデミー、26〜27日教区司祭大会、28日中野アカデミー、29日大口明光学園、31日修道女連盟

祈りの意向

【教皇の意向】 みことばによる祈り

【日本の教会】 平和と幸せ

「地上の平和」の原型は「キリストの平和」

故・糸永真一司教のブログから

正月元旦は教会にとつては主の降誕祭の8日目であり、特に母なる聖マリアを記念する祝日であるが、同時に、この日は教会が定めた「世界平和の日」である。

『カトリック教会のカテキズム』は地上の平和について次のように教えている。「地上の平和とは、メシア的『平和の君』（イザヤ9・5）であるキリストの平和の写しであり、実りです」（n.2305）。ここにいう「写し」の原語はimagoである。キリストの平和は地上の平和のモデルであるという意味になるうか。

そして「実り」の原語はfructusで、結果の意味であるから、キリストの平和を地上に適用した結果だと言えよう。要するに、地上の平和とは、キリストの平和をモデルとしてこれを地上に実現したものと言つて

よからう。

では、なぜキリストの平和が重要なのか。

上記カテキズムは平和について、第2バチカン公会議を引用して、次のように述べる。

「平和とは、単に戦争がないということだけではなく、また、敵対者間の力の均衡を図るということでもありません（現代世界憲章78）」。

その上、さらに「平和は秩序の静けさです」という聖アウグスチノの言葉、「平和は正義が造り出すもの」というイザヤ預言者の言葉（イザヤ32・17）、そして「平和は愛の結果です」という現代世界憲章78の言葉を引用している（n.2304）。

ここでまず、平和は秩序である、という言葉に注意しよう。かの有名なヨハネ23世の回勅『地上の平和』の冒頭の言葉が思い出され

る。

「あらゆる時代の人々が切望してやまない地上の平和は、神の定めた秩序を全面的に尊重してはじめて、これを築き、固めることができる」（緒言）。

そして、この秩序とは、物理的法則などのことではなく、人間の倫理的秩序、心の秩序であることを強調して次のように述べる。

「世界の創造主は、人間ののもっとも奥深いところに、秩序を刻みつけている。良心が人々に示し、かつ尊重するよう命ずる秩序がこれである」（同上）。聖アウグスチノが言う

「秩序の静けさ」の秩序である。

聖書の教えるところによれば、神が人間のために定めたこの心の秩序は原罪によって乱され、弱められた。アダムの長男カインが弟のアベルを殺して時以来、人類の歴史は分裂と争いの歴史となる。キリスト教の確信によれば、神の实子「み言葉」は受肉して人間となり、人類のすべての罪を背負って十字架上の死に身を委ね、人類をあがな

つて原初の秩序を回復した。カテキズムは述べる。「キリストはご自分の十字架の血によって、ご自分の中で憎しみを滅ぼし、人々を神と和解させ、ご自分の教会を全人類の一致、神との一致の秘跡となさいました」（同上）。

イザヤが預言したメシ

ア、すなわちキリストは「平和の君」であり、「キリストはわたしたちの平和（エフエズ2・14）である」。

キリストの平和は、まず何よりも人間の心の実現しなければならぬ。罪によって生じた心の矛盾、すなわち一切の「怒り」、つまり「仕返し願望」を捨て、愛の反対である一切の「意図的な憎しみ」を取り除いて、心の平和を取り戻さなければならぬ（カテキズムn.2302参照）。

心の平和こそ、地上の平和の原点である。つまり、キリストのあがないをもつて取り戻した心の平和、心の秩序を、地上の一切の制度の中に適用して、本来のあべき倫理的秩序を打ち立てなければならぬ。わたしは特に強調したいのは、あまりにも偏り、乱

れている世界の政治秩序、経済秩序、そして情報秩序の建て直しである。つまり、キリストの平和をモデルとして、国内的にも国際的にもすべての人の共通善を保障する政治秩序、奪い合うのではなく、世界中で公平に分ち合う経済秩序、そして真実と愛に基づく建設的な情報秩序を打ち立てなければならぬ。

こう言えば、キリストの平和を地上に実現するという理想はきわめて困難で遠い道のりのようにも思われるが、しかし、キリストの心を自分の良心として平和のために尽くすよう努力している人は、思想信条の違いを超えて無数に見られる。民主活動家劉曉波氏のノーベル平和賞受賞は世界の平和運動家を励ましたし、社会的企業に立ちあが

る若い企業家やいのちをかけて真実を追求するジャーナリストなどがあり、ボランティア活動もそれぞれの国の内外で活発である。これらニュースになる人々の背後に、名もない無数の善意の人々が日々隣人の幸せのために献身していることをわたしは信じて疑わない。キリストの平和の霊・聖霊はあまねく世界で、善意の人々とともに働いておられるからである。もしこれらの善意の人々の力が声を出し、結集されて大きなうねりとなれば、世界平和への道は大きく開かれるはずだ。

キリストは言われた。「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ5・9）。（2011年1月1日）

1月25日は世界こども助け合いの日（献金）

「世界こども助け合いの日」を呼びかける教皇庁児童宣教事業は、幼子イエスの保護にゆだねたいとの希望から、聖なる幼子の会または幼子宣教会とも呼ばれます。その目的は、「子どもたちを助けている子どもたち」をモットーに献身する、キリスト者の子どもたちの運動を促進し、生み出すことです。児童宣教事業の活動の頂点であるこの日、彼らは自分たちだけでなく世界中の子どもたちの幸せを願って祈り、犠牲をささげ、支援を行います。日本では、各教会に加え、カトリック系の幼稚園や保育園の大勢の子どもたちが献金に手紙や絵を添えて協力しています。当日の献金は全世界からローマ教皇庁・福音宣教省に送られ、世界各地の恵まれない子どもたちのために使われます。



要理

「人には誰にでも良いところと悪いところがある」ということは頭で分かっていますが、どうしても私たちには嫌いな人がいるものです。

そのこと自体は決して悪いことではありません。そこで誰かのことが嫌いになるパターンを考えてみるとだいたいこんな感じではないでしょうか。

第一段階として人は「誰かの」が嫌い」というように相手の一部分が好きではないことを理性的に理解しています。しかしこの「嫌い」という思いが持続するとそれが強まり第二段階に入り

ます。

そこでは心の中でその人「の」「こうしたところ（一部）」が消えかかってしまいます。そして最終段階としてその人「の」以降が完全に消えてしまい、感情的に「その人」と「嫌い」が直結してしまします。図解すると、

他人に対する「嫌い」の感情について

第一段階：誰か「の」「こうしたところ（一部）」が嫌い

第二段階：その人「の」「あの部分」が嫌い

最終段階：その人が嫌い

となります。

つまりこの過程で時間と共に「の」が抜けることにより本当の「能無し」となってしまうのです！ですから私たちは常にその人そのものではなくて、その人の一部が好きではないということとを心に留めておく必要があります。

これが相手を尊重するということであると言えるかもしれない。もしこのようにできるのであればパウロが「兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思ひなさい。」という勧めをいつも心掛けていることができるでしょう（ロマ12・10）。

相手を尊敬するとは相手を真っ向から否定しないという面もあるのです。